

私の小さな気づき

小野清美

ご近所づきあい（10月4日）

月に一度私の自宅の小さな庭で群馬の父親が作る野菜を売っている。かれこれ2年になるので、顔見知りの人も増えてきた。去年お米を販売したところ、スーパーの3分の2位の値段なので、注文をたくさんいただいた。今年も新米の時期が来た。父が作ったお米を食べてみたいという新たな人も出てきた。そんな中、何度も電話を頂く人がいた。チラシに私の携帯番号をいれたので、LINEもつながり、メッセージが届いた。「お米20kg注文します。」少しして、「お金がはいるのが11月2日なので、その時の支払いでいいですか？」「やはり10kgにします」こんな感じで、心配性なのかな、こだわりのある人かな、という印象だった。「私は〇歳です。去年夫が亡くなりました。今は1人暮らしで、うつ病です。ほとんど外にでていません。」「友達がいません。お友達になってください。」とも。「野菜を売る日にはご近所の方がたくさん見えるので、様子を見に出てきてください。優しい人がたくさんいますよ。」と返事をした。当日見えるかどうかかわからないけれど、その人にとって私は連絡できる存在になったかなと思う。みんな1人で頑張っている。

と思っていたが、なんとご主人から電話があった。「あれっ？」生きていた。と、そうではなく、亡くなったのは離婚した前のご主人で、今のご主人は10年前から一緒に住んでいるとのこと。「よかったです。ご主人がいらして」つつい言葉に出してしまった。

田舎者！！（10月18日）

忙しい時間に混雑した電車に乗るのは朝からパワーをむしり取られるようで、なかなか忍耐のいることだ。始発駅から乗って座って通勤できる私はとても恵まれている。

今朝そんな混雑する電車の中で、男性2人の小さいさかいがあった。みんなあっちにぶつかり、こっちにぶつかり、足を踏まれ、寄りかかれ、それなりに我慢している。そんな中で何だろう。2駅過ぎる間、何事もなければいいけど、と思いながら周りのみんなも耳だけその2人に集中した。「降りろ！」「降りたら遅刻するぞ！」喧嘩でも始業時間を気にするのはさすが日本人。

1人が目的の駅で降りた。未だ決着がついていないのに1人電車に残った彼が「二度と東京に来るな！このど田舎者が！！」と降りた彼の背中に向かって大きな声で捨て台詞を吐いた。

ちょっと髪の毛の薄い、小太りの彼は私と同じ降車駅だった。私は密かに、あなただって申しわけないけど、スマートな都会人ではない。そもそも東京は私のような田舎者の集まりなんだから。……もう少し心に余裕が欲しいと思った。

よりそう（10月19日）

足に血管が浮き出ているのが気になった。下肢静脈瘤というのだそうだ。それほどひどくはないが、たまたま静脈瘤の手術を専門に行っている病院の紹介ビラが新聞の折り込みで入ってきた。すぐに行ってみた。気になっているところは早めに治したい思いだった。小さな病院で、先生も凄く若く、はじめ看護師さんかなと思った。エコーで静脈を探っていくと、外観以上に瘤が大きいので手術をお薦めすると言われた。麻酔を使うので全く心配しないというわけにはいかないが、時間も短いので、1人で行って1人で帰ってくる予定にしていた。と、娘から電話が入った。「手術の時私も行くね」娘なりに心配していてくれた。看護師をしているので、時間があれば先生のお話を伺ったり、病院の様子も見たい思いがあったらしい。そして、前日来てくれた。はじめて家族全員分のカレーを作って。こんな日がくるなんて……。びんびんしている私だが、心はうるうるだった。時々息子に宛てたメールのなかに「お母さんをよろしくね。」と書いてくれたりする。ありがたい。

そして第二回目。今度は右足の手術をすることになった。手術とはいえ、すごく簡単なもの。15分か20分で終わってしまう。それでも麻酔を使うので怖いと思えば多少の緊張はする。今度は1人で病院に行った。「前は血管に麻酔液入れますね。」と言われたか言い終わらないくらいのうちにパタンと眠りに入ってしまったのだが、今回は先生が、「カテーテルの挿入口にマークをつけますね。」と言われ、カテーテルが体に入るのがわかるかと思うときまで目が開いていた。結局睡って、「小野さん、無事おわりましたよ」と先生に言われた声で眼が覚めた。

安心感というのは、ほんの些細な自分を思ってくれる、寄り添ってくれる心にあることに気付いた。

それにしても、本人確認とはいえ、手術室のホワイトボードに、私の名前、手術部位、生年月日、それにそれに体重までもが大きく大きく書かれていたのにまたまた恥ずかしい思いをした。早く痩せなくちゃ。

母のこと　ーその1ー　（11月11日）

母は4年前のお正月、父と野菜の出荷準備をし、夕食の仕度のために家に入るとすぐに倒れ込むように横になった。母の後を追ってきた父が「どうしたんだ！」と聞くと、「口がまわらない。うまくしゃべれない」と言う。父はすぐに救急車を呼び、母は病院に救急搬送された。幸いなことに父の気づきが早く、病院での処置も早かったため、体に麻痺が残るようなことはないとの診断だった。処置を終え病室に戻った母は静かに睡っていた。このまま朝まで睡るでしょうからご家族はご帰宅くださいという病院の話に納得して帰った。が、家に着くか着かないうちに病院から電話が掛かってきた。母の目が覚めた。病院にいたことが理解できず、点滴をつけたまま、歩き出そうとした。「ご家族の方、病院にいらしてください。」とのことでまた病院にとんぼ返りした。母は病院のベッドに自分がいることが納得できず、家に帰ろうと、起き上がり、歩き出してしまったらしい。

私たちがICUにかけつけると、母と看護師数名が対峙していて、母は険しい顔をし

ていた。母は車椅子にくくりつけられていた。さらに看護師さんからは、母に聞こえるところで、「睡眠薬を注射しましょう。朝までゆっくり寝ていただきたいし、翌朝、今の出来事を覚えている患者さんはいません。」と言った。が、私は納得のいかない母を睡眠薬で睡らせることはしたくなかった。せめてゆっくり時間を掛けた説明をして欲しかった。睡眠剤の注射だけはやめてもらった。

母は、家に帰ろうとした。そこを数名の看護師さんに取り囲まれ、力づくでベッドにもどそうとされた。安静が大事だが、母には見ず知らずの人に自分を任せる余裕はなく、白衣を着た看護師さん、医師はとても怖い存在だった。この怖い人たちに抵抗するため、母は何ともしようがなく、最後の投げられる物と、口の中の入歯を投げつけたらしい。母にはめずらしく強い調子で、「どうして私がこんな目にあわされなくてはいけないのか!」と抗議した。もう、誰の説明も、話も、母の耳には入らなかった。家族が病院に戻り、それでも納得までしていないが、安心したらしく、やっとベッドに横になった。父だけしばらく母のベッド脇にいることにして、私たちは帰った。母がぐっすり眠りにはいったので、父も帰宅できることになった。長い長い一日だった。

翌日、みんなで病院に行くと、母は昨夜のことをすべてしっかり覚えていた。大立ち回りをしたこと、何も抵抗できることがなく、入れ歯を投げつけたこと、車椅子にくくりつけられ、拘束されたこと。とても怖かったこと。

母の大立ち回りの話は母が入院していた二週間の間ずっと病室で話され、お見舞いに来てくれた人や私たちを笑わせた。こんなに笑える状態でよかったね、軽くすんだのは父の機転のおかげと感謝した。

義母の時も同様、年配の人が入院すると、眼が覚めた時に混乱し、自分がなぜ、今ここにいるのかを理解できなくなる、認知症の症状も現れると医師から実際の病気の説明と同じくらいの比重で、そのことを話された。

何かちょっとしたことだろうと思う。目覚めたときに、ちょっとした一言があれば、母は納得できて、大騒ぎになることはなかったかもしれない。人それぞれ、そのことを大前提に職務に当たって欲しいと思う。

脳梗塞で倒れた母は、体に麻痺こそ残らなかったが、物忘れがひどく、周りとのちょっとしたやりとりに「こんなはずではない」自分を感じ、葛藤している。

このことについては、また次回に。

